



「新しい林業」と林木育種

林木育種センター所長 今泉 裕治

このほど、新たな「森林・林業基本計画」がとりまとめられ、6月15日に閣議決定されました。新たな基本計画では、地球温暖化に伴う気候変動の影響など環境リスクが顕在化し、脱炭素（カーボンニュートラル）社会の実現に向けた気運（危機意識）が高まったことや、森林・林業を支える山村で、林業の採算性の低下に加え山地災害・森林被害の頻発化や少子高齢化・人口減少の加速化等を背景に森林管理に困難を来す状況が深刻化していることなどを踏まえる一方、近年、林業におけるリモートセンシングやICTの活用、耐火木質部材の開発等の技術革新が着実に進んだこと、「森林経営管理制度」「森林環境譲与税」などの制度的枠組みが整えられてきたことも踏まえ、そうした新たな技術や制度を活用して林業の生産性・安全性の抜本的な向上と収支のプラス転換を図る「新しい林業」の展開と木材・木質バイオマスの利用拡大を推し進め、効率的で持続的な林業の確立と森林の適正な管理の実現を目指すとともにカーボンニュートラルの実現にも貢献していくとの方向性が示されました。

この中で、「新しい林業」の具体的な姿として、「エリートツリー」や早生樹等のコンテナ苗を用い、低密度植栽、下刈り回数の低減、保育間伐の省略、短伐期収穫といった施業体系の転換とド

ローンによる苗木運搬や自動化機械の導入等を組み合わせ、大幅な生産性向上と造林作業の省力化を図っていくことが打ち出されたほか、再造林に不可欠な優良種苗を確保するため、林木遺伝資源の収集・保存、第3世代精英樹等の開発、採種園・採穂園の整備などに取り組むことも明記されました。

このように、「新しい林業」をはじめ、これからの森林・林業を支える基盤（縁の下の力持ち）としての林木育種への期待はかつてないほど高まっており、当センターはもとより、全国で林木育種に携わる関係者の総力を結集してこれに応えていく必要があります。

他方、成果が現れるまでに多大な手間と時間を要する林木育種にあって、期待される役割を確実に果たしていくためには、技術の進展や社会情勢の変化に的確に対応しつつ、異分野を含む関係者間の一層の連携と情報共有の下、予算やマンパワーを最大限効率的・効果的に投入していく必要があります。

当センターとしても、今後、様々な機会を捉え、将来の森林・林業像とその実現のための林木育種のあり方・戦略について、関係者の皆様と議論を深め、認識・理解の共有を図っていきたいと考えています。

【紙面紹介】

第5期中長期計画における森林総合研究所林木育種センターと
森林バイオ研究センターの取組 2～5
炭素貯留能力の高い造林樹種の効率的育種プロジェクト 6

都道府県等への技術指導について 7
スギ細胞へのタンパク質直接導入法の確立
ーゲノム編集技術の効率化に向けてー 8



国立研究開発法人 森林研究・整備機構
森林総合研究所林木育種センター

Forest Tree Breeding Center, Forestry and Forest Products Research Institute